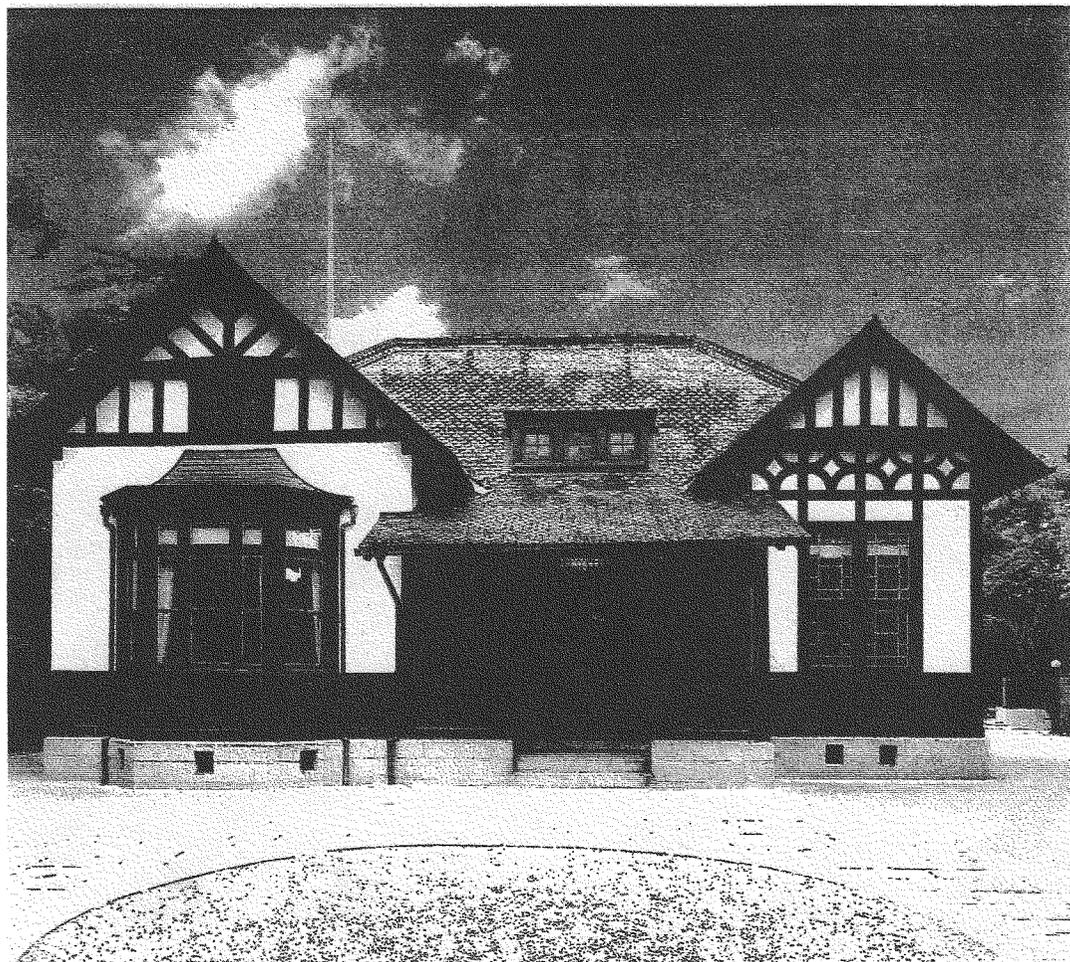


呉周辺の史跡を訪ねる

—海を通して瀬戸内の歴史と文化を垣間見る—



入船山記念館

主催 備陽史探訪の会 企画 歴史民俗研究部会
講師・資料作成 平田雅郁 平田恵彦

平成14年(2002)7月7日(日)

「呉周辺の史跡を訪ねる」行程表

—海を通して瀬戸内の歴史と文化を垣間見る—

*福山駅北口集合	7:20
*福山駅北口発	7:30 (集まり次第出発)
*福山西IC着	7:45
*小谷SA着	8:20 (トイレ休憩)
小谷SA発	8:30
*西条IC着	8:35
*松濤園(しょうとうえん)着	9:35 (トイレあり)
御馳走一番館・陶磁器館・あかりの館・福島雁木等見学	9:40~10:55
松濤園発	11:00
*入船山記念館着	11:40 (トイレあり)
昼食(休憩所=トウゴウハウス)	11:45~12:15
旧呉鎮守府司令長官官舎・史料館・呉歴史民俗資料館等見学	12:20~13:00
入船山記念館発	13:05
*音戸大橋通過	13:20
*海上自衛隊(江田島)着	14:05
海上自衛隊第1術科学校・幹部候補生学校など見学	14:10~14:40
教育参考館見学	14:40~15:30 (トイレあり)
*海上自衛隊(江田島)発	15:35
*音戸大橋PA着	16:20 (トイレ休憩)
音戸大橋PA発	16:30
*広交差点	16:50
*西条IC着	17:50
*小谷SA着	17:55 (トイレ休憩)
小谷SA発	18:05
*福山西IC着	18:40
*福山駅北口着	19:00

【諸注意】

- ◆団体行動です。くれぐれも勝手な行動は慎んでください。
- ◆もし迷子になったら、右の携帯電話に連絡して下さい。
- ◆松濤園の見学が終わったら、番所側から臨時出口を開けてもらいます。ここから福島雁木の見学に行きます。間違ってもバスに戻らないでください。
- ◆今回は酒屋へ寄る時間がないので、ビールを24本用意しました(実費で販売)。これで不足する場合はご容赦ください。

「呉周辺の史跡を訪ねる」参加者名簿およびグループ分け

《松濤園見学グループA》

- ★
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10
- 11
- 12
- 13
- 14
- 15
- 16
- 17
- 18
- 19
- 20
- 21
- 22
- 23
- 24
- 25
- 26

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

《松濤園見学グループB》

- ★
- 27
- 28
- 29
- 30
- 31
- 32
- 33
- 34
- 35
- 36
- 37
- 38
- 39
- 40
- 41
- 42
- 43
- 44
- 45
- 46
- 47
- 48
- 49
- 50
- 51
- 52
- 53 ○

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

参加費 □ = 4500円 ○ = 4800円

瀬戸内海は東西およそ240海里、南北は3海里から30海里、その間、俗称3000ともよばれる島々があり、その面積は瀬戸内海の1割ほどだといわれている。第6管区海上保安本部によると、周囲100m以上の島は727、そのうち有人島は約160であるという。周囲100m以下の島や、また干潮時には姿をみせる岩礁などを加えるとおびただしい数になる。俗称3000もあながち誇張といえないかもしれない。

瀬戸内海の灘は、東から播磨灘、備讃瀬戸、燧灘（ひうちだ）、備後灘、芸予瀬戸、安芸灘、広島湾、伊予灘、周防灘（すおうだ）の海域に区別することができる。瀬戸内海は多島海として世界的な美しさを持っているが、その美しさをもっとも特徴的に示しているのが芸予瀬戸と備讃瀬戸なのである。



《下蒲刈島大平山展望台から見た安芸灘》

★安芸灘大橋とオレンジライン

平成12年(2000)1月、安芸郡川尻町と豊田郡下蒲刈町（下蒲刈島）を結ぶ「安芸灘大橋」が完成した。橋長1175m、吊り橋としては国内第9位、世界第27位の規模を誇る。八つの橋で島々を結ぶ広島県の安芸灘諸島連絡架橋事業で、6番目にしてはじめて下蒲刈島と本土側が地つづきになった。

この連絡架橋は「豊かな多島美に映える希望の架け橋」といわれ、自然的・経済的に厳しい条件下にある広島県の離島地域を8橋で結び、日常生活の利便性の向上、地域産業の振興、広域市町村圏の充実を図るものであった。

この事業は、本土側の川尻町から下蒲刈町（下蒲刈島）・蒲刈町（上蒲刈島）・豊田郡豊浜町（豊島）・同郡豊町（大崎下島）・愛媛県越智郡関前村（岡村島）・豊田郡木江町（大崎上島）にいたる計画で、8橋のうち蒲刈大橋（下蒲刈島～上蒲刈島）、豊浜大橋（豊島～大崎下島）、そして大崎下島から岡村島を結ぶ平羅（へいら）橋・中の瀬戸大橋・岡村大橋（この3橋による道路を「オレンジライン」とよんでいる）はすでに開通しており、残すところは上蒲刈島から豊島、岡村島から大崎上島への2橋だけとなっている。また、最終的には「しまなみ海道」にT字形に連結される構想である。

架橋後の島の生活は確かに便利になり、以前とは大きく変わっている。自然を楽しむ観光を目的とした多くの人々が来島し、逆に島外に出かけて夜遅くなくても家に帰ることもでき、また、急病人を本土の大病院にすぐに移送できるなど、クルマ社会に生きる者にとってはよいことづくめのようなのである。だが、クルマに乗らない人にとっては、船便の廃止・バス便の少なさなどでかえって不便になった点もある。また、多くのクルマの来島により、交通事故が多発し、これまでなかった信号機を新設しなければならなくなった。また、空き缶・空き瓶の投棄、暴走族の無謀運転などもあり、クルマ社会に対する島民の考えは激変している。



《安芸灘大橋（川尻町から下蒲刈島を望む）》

★下蒲刈島 (しもがかりじま)

上蒲刈島(蒲刈町)の西、呉市仁方(にがた)の南約1kmの海上に浮かぶ面積8.76km²の島で、行政区画としては下蒲刈町に属する(南にある上黒島・下黒島も町域)。平成12年(2000)1月、安芸灘大橋が完成するまでは、下蒲刈島・上蒲刈島へは呉市の仁方港からフェリーまたは高速艇で渡っていた。

下蒲刈島は全島が標高200mほどの山地で、わずかに北東部の入江と三之瀬水道(さんぬせすいどう)に面する地、および南東に開いた入江奥に平地がある。町の中心三之瀬は、蒲刈町東端の向(むかい)と幅300mほどの三之瀬水道を挟んで対峙(たいじ)する。

産業は、平地が少ないので、山の斜面にだんだん畑が開かれ、ミカン・野菜・雑穀類が栽培されている。島の南岸では小規模ながら沿岸漁業が行われており、エビ・タイ・イワシなどが水揚げされている。

下蒲刈島は古くから瀬戸内海航路の要衝にあたり、船泊まりとして栄えたところである。島の中心、三之瀬は江戸時代幕府指定の「海駅(かいえき)」が設置されていた。参勤交替をする西国大名の船をはじめ、朝鮮・琉球・オランダの使節もここに立ち寄り、本陣・番所のほか、朝鮮使節の宿館も整備された。

☆丸屋[多賀谷]城跡(まるや[たがや]じょうあと)

中世、三之瀬(さんぬせ)の北方の天神鼻にいたる長さ600m余、標高20m~40mの細長い半島に多賀谷氏(たがやし)の丸屋城が築かれていた。

多賀谷氏は武蔵国埼玉郡多賀谷(現、埼玉県北埼玉郡騎西町[きさいちょう]田ヶ谷)を本貫の地とする鎌倉御家人であった。鎌倉時代後半に伊予国周敷郡北条村(現、愛媛県東予市)の地頭職(じゆしやく)を得、のち、南北朝期に北上して倉橋島・蒲刈島に根拠を移した。

多賀谷氏は蒲刈島(中世には上・下あわせて蒲刈島とよんだ)に関所を設け、航行する船の水先案内や警固(警護)をして通行税を徴収していた。応永27年(1420)年宋希環(そうきい)の『老松堂日本行録』(らうしょうどうにほんこうろく)の中に蒲刈島に1泊した際の、次のような興味深い記事(現代語訳、要約)がみられる。

この地(蒲刈島)は群賊のいるところで王の命令がおよばず、統属がなく護送の船もないので一行の衆は怖れている。しかし、この地には東西の海賊があつて、東からの船は東賊1



《三之瀬水道と三之瀬港》



《丸屋[多賀谷]城跡》

人を乗せてくれば西賊が害をしない。また西から来る船に西賊1人を乗せていれれば東賊は害をしない。その事情を知っていた宋金（宋希環に同行した博多の商人）は東賊1人を銭7貫で買って乗せてきた。その賊は自分が来たから安心せよと言って、島の首領の家に行つてたちまち説得してきた。

多賀谷氏は、14世紀末から16世紀末に至る中世後半期およそ200年間にわたって、この地方で勢力をふるっていた。同氏一族は、「多賀谷衆」とか「多賀谷水軍」とよばれ、通行税が支払れば、水先案内をつとめ、また警固もつとめたので「警固衆」ともいわれ、独自性をもった一団であった。

丸屋城の最後の城主は、多賀谷久兵衛元重といわれ、後に毛利氏に従つて山口に移った。

◆朝鮮通信使(ちょうせんつうしんし)

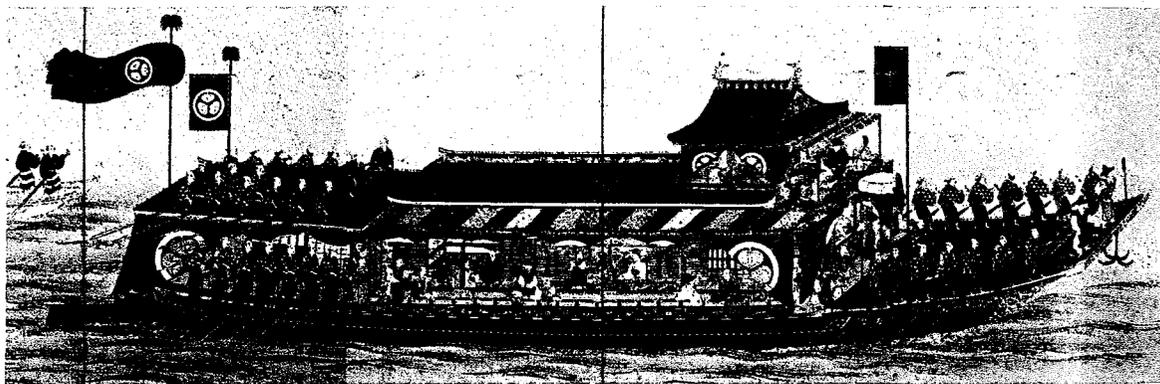
朝鮮国王が書契(国書)・礼单(進物)をもって、足利将軍および徳川将軍に派遣した外交使節団のこと。単に「通信使」あるいは「朝鮮信使」「信使」「朝鮮来聘使(らいびんし)」「来聘使」「御代替り信使」などとも呼ばれた。

その先例は高麗王朝辛禑王元年(永和元年[1375])2月にみられる。朝鮮王朝の成宗朝には、編成や携帯品も規定されたが、その様式と性格が固定してくるのは、孝宗朝(明暦通信使)からである。室町時代に来朝した通信使は、世宗朝の3回だけであり、その詳細は不明であるが、幕府のほかには大内氏や九州諸豪族とも交渉していて、江戸時代における幕府のみとの交渉とは性格を異にしている。

これは室町幕府が地方豪族に対する絶対的な統制力に欠けていた政情から生じたものだ。来聘の理由については室町時代倭寇禁止の要請や将軍襲職祝賀が多く、幕府も同じ認識で迎えている。2回にわたる豊臣政権のもとでは、いずれも日本軍の朝鮮半島侵入が関係した。

江戸時代の来朝は12回におよんだが、初期の5回までは複雑な理由を秘めていた。たとえば、寛永13年(1636)の通信使の場合は、幕府側は「泰平の祝賀」と考えたが、朝鮮王朝では、幕府が行った「日本国大君号」の制定、以厩庵(いあんてい)の創設、対馬藩家老柳川氏の処分などの朝鮮政策の変更の意味を探るものであった。さらに柳川氏と対立した対馬藩主(宗義成)を擁護するためであり、また、北方の後金の圧力に抗し、「向明排金」の政策を維持するため、南方の日本との和平を保つ必要に迫られてのものだった。

このように来聘理由は、日朝領国の政情や東アジアの動向に関連していた。明暦通信使から両国の認識が「日本将軍の襲職祝賀」に安定してくるのも、中国における清朝支配の確立がその背景としてあった。



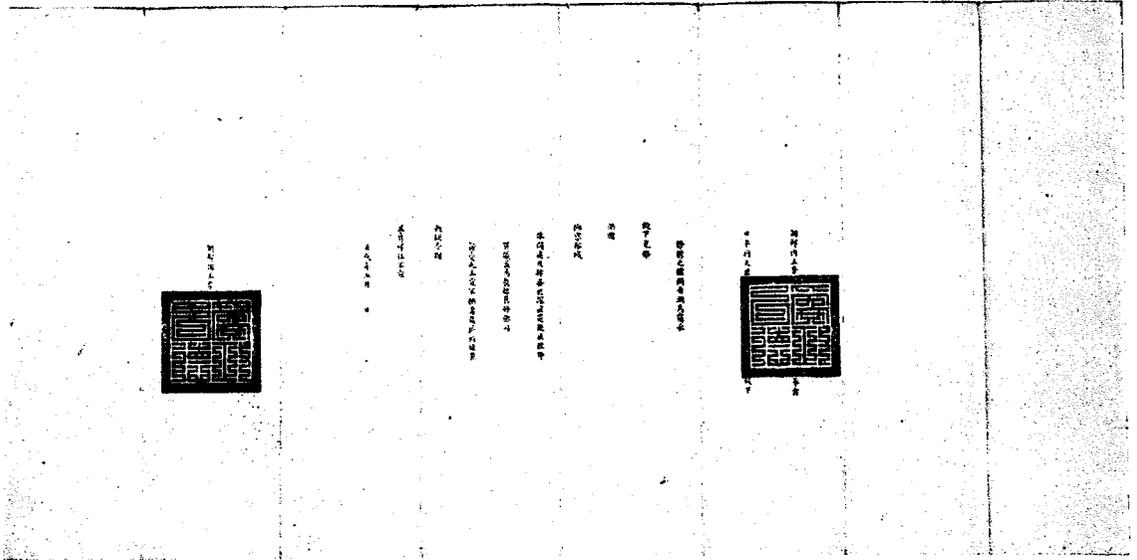
《朝鮮通信使船団図屏風6曲4隻(部分)》

◇通信使の編成と献上品(つうしんしのへんせいとけんじょうひん)

朝鮮通信の編成は、正使(文官堂上正三品)・副使(文官堂下正三品)・従事官(文官五・六品、初め書状官)・堂上訳官(上上官)・上通事(漢学1員・倭学1員)・製述官(文才官)・良医・次上通事・押物官(進物輸送通訳)・写字官・医員・画員・子弟軍官(三使護衛)・軍官・書記・別破陣・馬上才・典学・理馬(馬の世話)・尙伴(しょうばん、三使の従僕)・船将・ト船将(進物船船長)・陪童・礼単直(進物係)・盤纏直(物品係)、以下は砲手・鼓手・旗手・格軍(兵士)等におよんでいた。

人員は慶長12年(1607)から文化8年(1811)まで不同である。

使節は徳川将軍への書契(国書)とともに、礼単(別幅)として、大繻子(しゆ)・大段子(だん)・黄照布・綿紬(めんぢゆう)・人參・虎皮・豹皮・彩花蓆(さいかせき)・駿馬・鷹・黄蜜・筆・墨などを携行し、ほかに御三家・老中・所司代らにも持参した。



《朝鮮国書》

◇通信使の旅程(つうしんしのりよてい)

朝鮮通信使の日本使行は、王城を出発し、陸路、ときに江路を利用して釜山に至って海神祭を行い、のちに騎船3隻・ト船3隻に分乗して、対馬藩よりの迎聘参判使(朝鮮では通信使護行差倭)ともに出港することが通例であった。

対馬府中(厳原[いげん])に入り、海路を杵岐—藍島—赤間関—上関とたどり、瀬戸内海を東へ進み、鎌刈(蒲刈)—鞆津—牛窓—室津—兵庫を経て大坂に達した。ここから諸大名提供の川御座船に乗って淀川をさかのぼり、淀浦から陸路を、これも諸大名提供の人馬を用い、京都を経て朝鮮人街道(近江国)より東海道を江戸に下った。

沿路の諸藩では、幕府の指令もあって、海陸の護衛を厳重にして安全を図り、新築・改装した客館では華麗な饗応を行った。客館における彼我の学者・文人の交流は盛んであり、三使(正使・副使・従使)・製述官をはじめ一行は対応に忙殺された。

江戸に着くと、吉日を選んで城中大広間において諸大名列座のなか、聘礼(へいれい)の儀(朝鮮では伝命)があり、国書・進物が献上され、将軍から三使への慰労があった。終わると御三家による饗宴が恒例だった。正徳通信使の際、新井白石により儀式に大改革が実施されたが、徳川吉宗によって復旧された。寛永13年(1636)からは3回にわたって日光山参詣も行われている。やがて将軍から返翰(へんかん)と別幅を受け、往路を逆にたどって帰国した。

◇通信使来日の主目的(つうしんしのらいにちのしゅもくてき)

朝鮮通信使の来日は、260余年にわたる徳川幕府の全期間を通じて12回ある。もともと、初期のころは「回答使」または「刷還使」といわれ、のちになって通信使となった。

具体的にいえば、日本側から国交回復を求めるための、手だてを尽くした働きかけに対する回答使であり、それにあわせて、出兵時に日本側に拉致(らぢ)された朝鮮人俘虜(ふりよ)の送還を交渉し、受け入れのための刷還使でもあった。寛永13年(1636)から通信使として定例化したものである。

基本的には日本側からの使節派遣の要請に応じるという形をとられた。たとえば、征夷大將軍が交替すると、対馬藩主宋氏はまず大慶参判使を送ってこれを告げ、次にあらためて修聘参判使を送って通信使の派遣を要請した。

朝鮮側では、通信使の三使(正使・副使・従事官)が任命され、一行の構成がおわると、迎聘参判使がこれを釜山に迎えた。そして、いよいよ通信使来日のはこびとなる。

◇通信使来日まで(つうしんしのらいにちまで)

室町時代から盛んになっていた朝鮮との交流は、豊臣秀吉の朝鮮出兵によって一時中断していた。しかし江戸幕府が成立後、明(中国)との国交回復、貿易を切望した家康は、まず朝鮮との復交に努力した。

幕府や朝鮮への対馬藩の積極的な工作、朝鮮側からの使者の派遣等により、両国がお互いにその国情を把握した上で、慶長12年(1607)に徳川幕府として第1回目の朝鮮使節を迎えるにいたった。

慶長14年(1609)には、中断していた朝鮮貿易を再開する「己酉(きゆう)条約」も結ばれ、釜山に広大な対馬藩の外交・貿易の館である倭館が設けられた。釜山と対馬の間では、小型通信使ともいべき定期使がひんぱんに往来した。倭館の10万坪の敷地は、長崎オランダ屋敷の25倍の広大な土地であり、出島の清国・オランダより規模の大きい貿易・外交が行

文化八	明和元	宝曆十元	寛延享元	享保四	正徳元	天和二	明暦元	寛永二十	寛永十三	寛永元	元和三	慶長十二	日本	年
													西歴	代
一八一	一七六四	一七四八	一七四八	一七一九	一七一	一六八二	一六五五	一六四三	一六三六	一六二四	一六一七	一六〇七		
金履喬	趙職	洪啓禧	洪致中	趙泰徳	尹趾完	趙珩	尹順之	任統	鄭岄	吳允謙	呂祐吉		正使	
家齊の襲職	家治の襲職	家重の襲職	吉宗の襲職	家宣の襲職	綱吉の襲職	家綱の襲職	家綱の誕生	泰平の賀	家光の襲職	大坂平定	和好		使命	
/	一・十九	八・二十七	九・七	七・十八	八・十八	五・二十六	十一・四	十一・六	八・十三	閏八・十一			往路	蒲刈
/	五・十八	七・十二	十一・二十二	十・十一	十二・	九・十四	二・七	二・二	九・二十二	九・十九			復路	着
三三六	四七二	四七五	四七五	五〇〇	四七五	四八八	四六二	四七五	三〇〇	四二八	四六七		総人員	
対馬聘礼	〃	〃	〃	新井白石の改革	〃	〃	〃	通信使	〃	伏見で応接	回答使兼刷還使		備考	

《江戸期の朝鮮通信使要項一覧》

われていた。

朝鮮が通信使を派遣し、徳川幕府がこれを江戸に迎える。つまり、幕府は通信使の来日と拳国的な歓迎を通じて、諸国大名や武士・町人・農民等にその権威を強く印象づけることもに、貿易による物資の交流、朝鮮の進んだ学問・文化を吸収するという面でのメリットが考えられた。一方、朝鮮にとっては、秀吉の朝鮮出兵の苦い経験があり日本国内の状況を観察、把握する使命が課せられた。

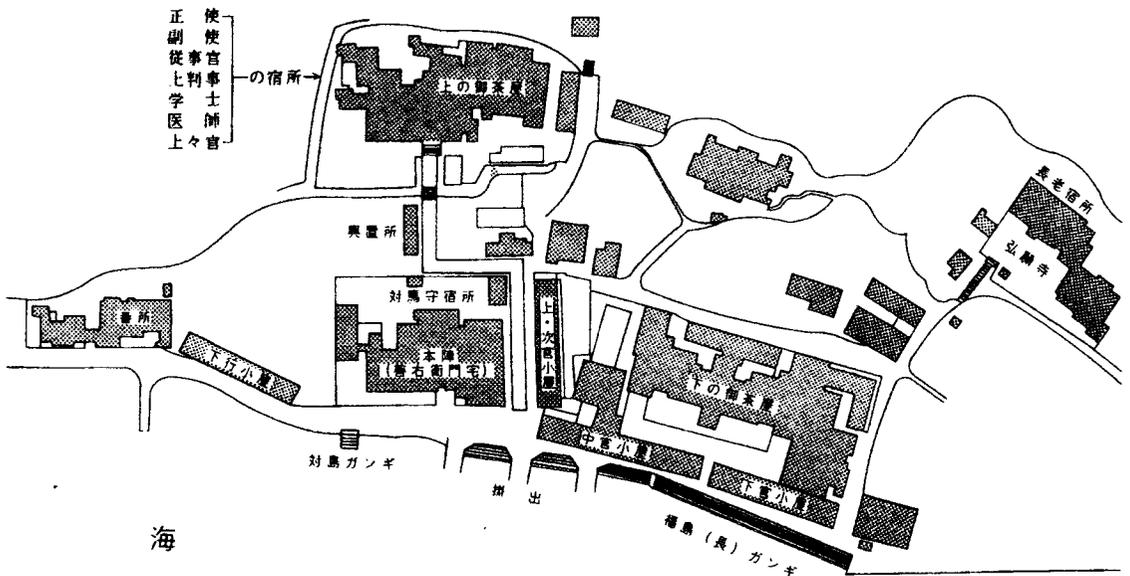
◇通信使の来日にそなえて(つうしんしのらいにちをそなえて) *茶屋等の新築整備、大改善(ちややとうのしんちくせいび、たいがいぜん)

下蒲刈島三之瀬(さんせ)の長雁木(福島雁木)には、三使(正使・副使・従事官)らの上陸にそなえて、橋の準備(福島雁木の本陣より長さ3間半の両側に勾欄(こうらん)をつけた棧橋のようなものを3カ所)が行われ、本陣より上の御茶屋通路は、折れ廻りの長廊下で38間、門まで毛氈(もうせん)177枚を敷きつめ、その下に薄縁左右に紫幕をかけ、廊下の両輪には2尺の腰板竹輦台(くれんだい)をつくっていた。

本陣・御茶屋等は「蒲刈島御馳走所絵図」によって、修理改善されていることがわかる。とくに御茶屋は、来日の都度大改善が行われた。これは対馬藩の立会の上決定され、往路と復路においては少し異なった改修がされていたので、ほとんど新築と同様の手数を要したことになった。通信使三使は、上の御茶屋へは入り、禅僧は弘願寺(くわんじ)を宿舎とした。

その他、通信使来日の都度に特別に新設されるものとして、下の御茶屋と福島雁木の間には梁間2間半、桁行19間、90畳の中官小屋、2間半、15間、75畳の下官小屋。下の御茶屋と本陣の間には75畳の上官小屋および15畳の次官部屋等があり、その他十数棟が新築された。

また、上官小屋等には前輪純子幕を張り、壁造りの背側面には一面に金屏風を立て廻し、上の御茶屋にもいたるところに金屏風を用いていた。



《正徳年度蒲刈島御馳走所絵図》

◇通信使の到着と饗応(つうしんしのとうちやくときょうおう)

＊安芸蒲刈御馳走一番(あきがまがりごちそういちばん)

用意万端整っているこの三之瀬瀬戸に大船団が到着したときの記録は、『海遊録』(現代語訳)によれば次のようなものだ。

館にいたる。館宇は宏麗にして、錦練帳、金銀屏を設けている。湾口から館にいたるまで百余歩ばかり、すべ紅氈を敷いた閘道の、中を行く。厨供は一朝に雉三百余羽が進呈される。赤間関(下関)でもなかったことだ。鎌刈(蒲刈)は、一名蒲碓ともいう。地は安芸州に属す。居民の舎屋は松竹の間に燐の如く立ち並び、前湾の鏡のような水面に相映り、瀟洒朗灑これまた海中の名勝である。

と、賛辞とも、歓声ともつかぬ当時の印象を書きとめている。

正徳年度における通信使往来の際、幕府より所々の馳走の様子を、おたずねに対して、対馬藩主宋氏は、天和年度「安芸蒲刈御馳走一番」と注進している。蒲刈における饗応が他藩を圧倒していたことが、これによつてうかがえる。

通信使に「安芸蒲刈御馳走一番」といわせたくらいだから、想像を絶

するような饗応をしていた。三使と上官は朝夕は「七五三の膳」、昼は「五五三の膳」であった。七五三といえば約50種類の料理で、菓子だけでも10種類にのぼるものである。これらは儀礼用の料理で、通信使はほとんど箸をつけず、別につくった料理：引替(三汁一五菜、吸物一種、肴三種、菓子五種等々)を食した。

ここに、寛永13年(1636)来日の通信使一行の京都・大徳寺での昼食の献立をのぞいてみると、正使他4人には「五五三の膳」だった。これは「七五三の膳」に次ぐ盛饗で、本膳・二の膳は五色、三の膳は三色の料理がついていた。

- | | |
|-----|---|
| 本膳 | 塩漬けの魚、かまぼこ、大根とサヨリのなます、汁(焼豆腐・大根・芋・ごぼう・摘入)、香物、飯 |
| 二の膳 | まきスルメ、貝、カラスミ、クラゲ、汁(雁・ふ・しいたけ) |
| 三の膳 | 羽盛(鶉などの焼鳥を、翼をひろげ飛んでいる姿で鉢に盛ったもの)、フナ盛(伊勢えびを高く盛ったもの)、さざえ、鯛の汁 |
| 引物 | 小鯛の浜焼、いり鳥(鶏肉を醤油・砂糖・味醂でいりつけたもの)、エビ、蒸し貝、すし、鮎の吸物 |
| 菓子 | カステラ、カキ、ミカン、饅頭、あるへいとう、算餅(うるち粉と氷砂糖の粉で算木の形につくった餅)、ぼうる |

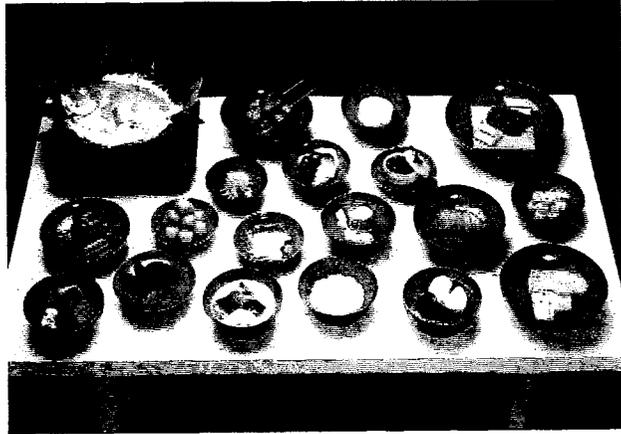
蒲刈での饗応の記録はないが、このようなことから、その様子を想像できる。



《七五三の膳(本膳)》



《三の膳》



《三汁十五菜》

◇文化面での交流 (ぶんがめんでのこうりゅう)

通信使の来日による歓迎は、鎖国体制をとりつづける幕府当局の深い関心事であったばかりでなく、貿易によって国外製品の輸入による利潤が考えられ、諸国大名や武士、町人や商人、農民など広い範囲の庶民各層大きく注目するところであった。しかし、それにもまして当時の日本の学者、文人、医者などの知識層が通信使の来日に向けた期待は、まさに異常なまでに大きかった。

通信使一行中の接触、交流を、「一世一代の大事」、あるいは「終身の栄」として考えていた。日本各地から通信使の宿舎へ馳せ参じ、詩の唱酬から作詩への批評・添削、書画の揮毫(きこう)を乞い、筆談によって、朝鮮の政情風俗、学問や文化、医術、技術などの各分野の現況をたずね、そこから大きな文化的感銘をうけた。

当時の記録によると、通信使一行中の朝鮮文人は、わずか3、4ヶ月の間に一千余名の日本人と面接し、二千余編の詩の唱和に応じたといわれている。

★松濤園 (しょうとうえん)

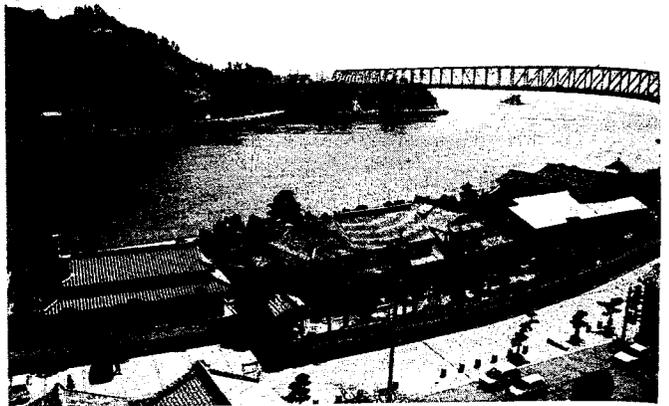
富山県砺波(とね)地方の代表的な商家造りである旧有川邸を「朝鮮通信使資料館」として、山口県上関(かみのせき)町の商家、旧吉田邸を「あかりの館」として、宮島町の町屋、旧木上邸を「陶磁器館」としてそれぞれ移築復元し、また、海上交通において重要な役割を果たした浅野藩三之瀬御番所跡を復元した総合文化施設である。

「朝鮮通信使資料館」は明治ごろの商家を改造した展示館で、当時の通信使行列を配したジオラマ、精密に再現された等身大の人形、1/10の通信使船の模型や各種の絵画、資料の展示など、いくつかある同目的の資料館のなかで最も充実している。

「あかりの館」は古い土蔵造りの建築で、世界の珍しい灯火器のコレクションを年代順に展示している。なかでもフェアリーランプの蒐集(しゅうしゅう)は世界でも有数といわれている。

「陶磁器館」は18世紀末ごろの町屋を改造したもので、館内には中国・朝鮮の陶磁器、日本では、初期伊万里から古九谷・柿右衛門・鍋島・古備前・萩焼などの名品がそろい、陶磁器の世界が一望できるようになっている。

また、園内は鑑賞式庭園となっており、四季折々の自然の美しさ

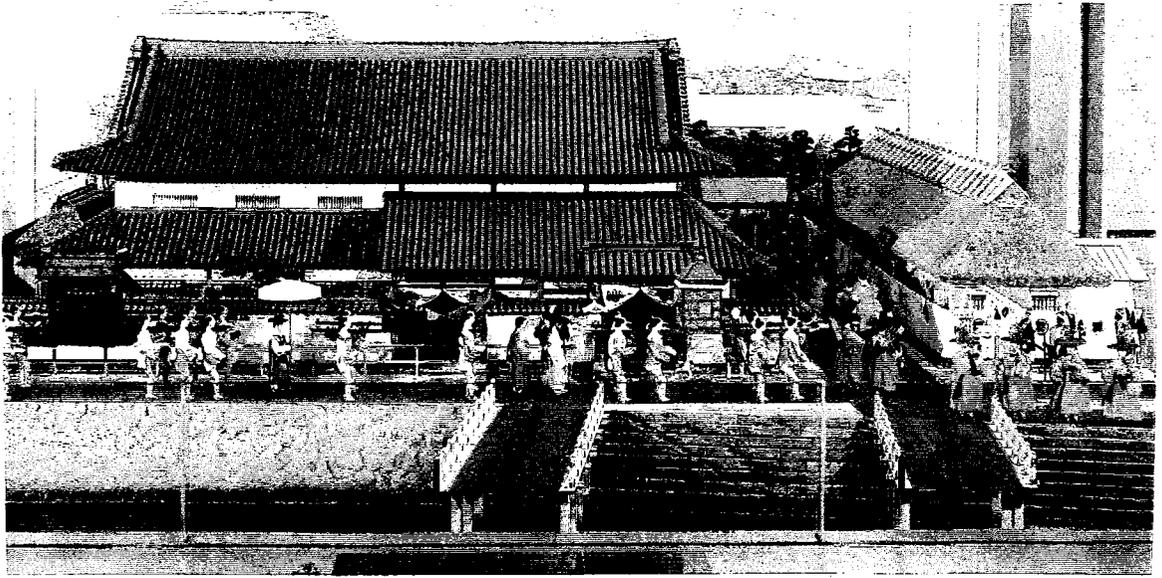


《松濤園全景と蒲刈大橋》

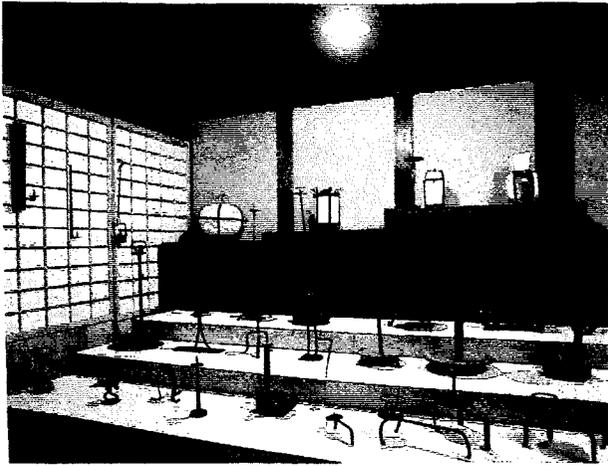


《御馳走一番館 (朝鮮通信使資料館)》

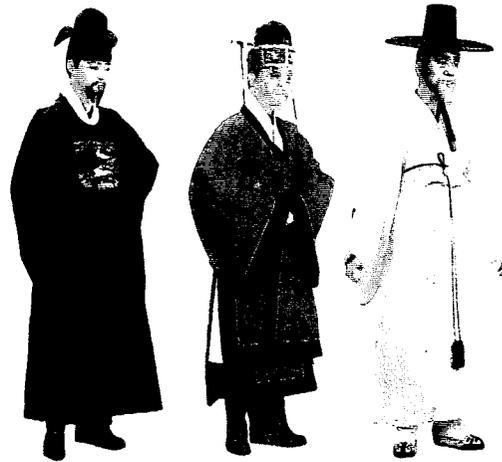
を鑑賞できるようになっている。



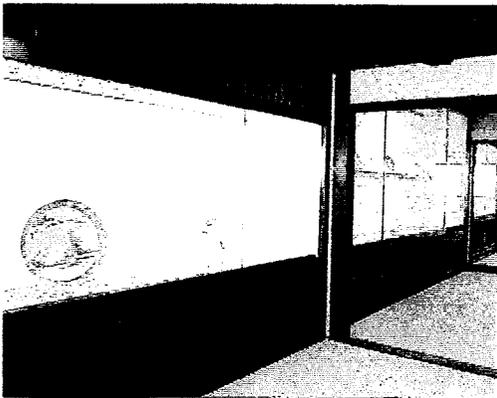
《浦刈本陣と通信使行列模型（御馳走一番館の展示）》



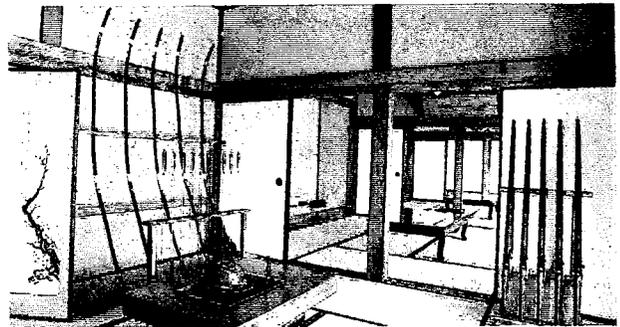
《あかりの館の展示「日本のあかり」》



《三使の等身大人形（御馳走一番館の展示）》



《陶磁器館の展示》



《復元された三之瀬番所内部》

★ 三之瀬本陣・御番所跡 (さんのせほんじん・ごばんしょあと)

三之瀬本陣は現在の下蒲刈島町役場付近にあたり、15間4方の広さをもっていたという。本陣預かりは中世の蒲刈島領主多賀谷氏の子孫で、江戸中期の「多賀谷久兵衛覚書」(『萩藩閥閥録』所収)にも「芸州蒲刈二多賀谷と申者罷居、御家御代々御宿主仕候」とある。

この本陣には、海路による西国大名の参勤交替、朝鮮通信使の往来、長崎奉行の江戸との連絡、オランダ商館長、琉球使節の往復などの際に寄港、重要な役割をはたしていた。

三之瀬本陣は、浜本陣として設営されたものといわれ、玄関、次の間、御居間、御寝間、納戸、風呂など大名の宿陣に適した、いたれりつくせりの状況であったという。なお、三之瀬本陣跡は昭和15年(1940)2月23日、広島県史跡に指定された。

蒲刈御番所には広島藩の繋船奉行(けいせんびさう)のもとに、定数の船頭・加子(か)がおかれ、番船などもつながれて海上の警備にあっていた。その繋船場は東側7間、西側13間の波塘(は、防波堤)を築いて造られたという。御番所跡は以前、旧下蒲刈小学校の構内となっていたが、現在は公園として整備されている。山口県山陽町に現存する毛利藩の番所を参考に建築当初の姿に復元されている。



《三之瀬周辺の史跡・文化施設》

★ 三之瀬朝鮮通信使宿館跡 (さんのせちようせんつうしんししゅつかんあと)

慶長12年(1607)から文化8年(1811)まで12回に及ぶ朝鮮通信使の来朝は(ただし、最後の文化8年のみ対馬交聘(こうへい)、琉球使節の参府、オランダカピタンの江戸参礼とともに、鎖国時代の一異彩とされた重要な行事である。

しかもその規模の大きいことは他二者の比ではなく、人員は約500人の使節団に随行する宋対馬守とその家臣(禅僧・通事を含む)700人~800人総計1200人におよんだ。これを沿路の大名は約1000人で接待・警固(警護)に全力を尽くした。

船団としては朝鮮通信使の正使・副使・従事官の船各1艘、卜船(供船)3艘の計6艘、宋対馬守乗船50艘ならびにこれらをあやつる漕船、迎船等200隻~300隻におよぶ大船団の航行になっていた。

三之瀬にはたいてい船を寄せて1泊した。その接待は広島浅野藩が担当した。幕府より沿道諸大名には国賓としてこれに対処する旨、達せられていた。したがって通信使一行の接待は各藩が競争し、他藩に負けぬようにと、いろいろ苦勞がはらわれていた。

昭和15年(1940)2月23日、広島県史跡に指定された。

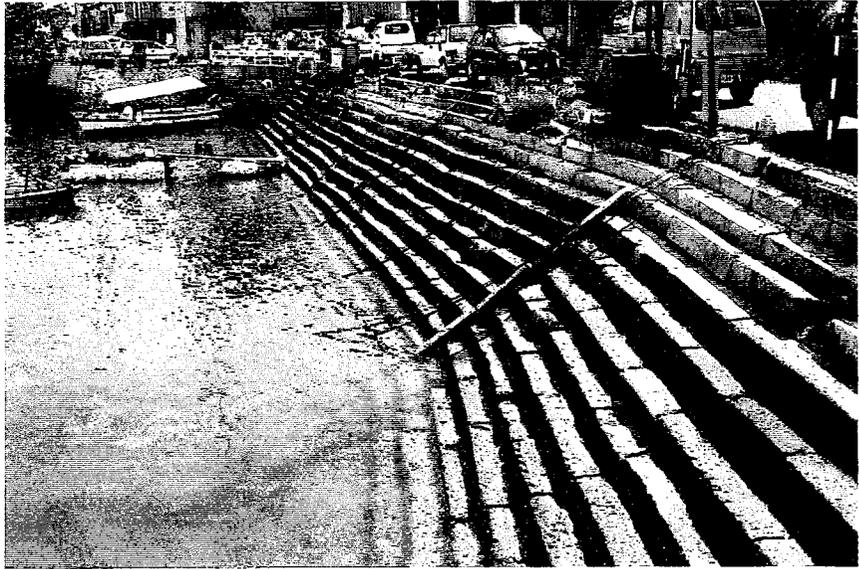
★ 三之瀬海駅 (さんのせがいえき)

下蒲刈島の東岸、三之瀬におかれた海駅。



《「お茶屋」の地名と石段のみ残る》

この海駅は幕府の命を受けた福島正則によって構築されたと伝えられている。このとき築かれた船着き場、長雁木は「福島雁木」とよばれている。最初は11段であったものが、昭和になって地盤沈下等によって、上部3段がつけ足され14段となった。



《いまに残る長雁木（福島雁木）》

長さも埋立工事等により、約55m（当時約115m〔63間〕あったといわれている）と短くなっている。

福島氏改易後、浅野氏もここを藩の繋船場とし、本陣・上の御茶屋・下の御茶屋・番所などをおいた。本陣や上の御茶屋・下の御茶屋は、将軍交替のたびに派遣される朝鮮通信使や、江戸参府のオランダ商館のカピタンの宿館にもあてられた。

福島雁木の西隣に長さ5.6m17段の「対馬雁木」があったが、現存しない。これは、朝鮮通信使来日の都度同道した対馬藩主宋氏の専用の石段といわれ、宋氏の宿舎であった本陣の前に位置していた。

◆呉の歴史（くれのれきし）

縄文時代は、農耕・漁を中心に営む小さな集落にすぎなかった呉。奈良時代になると瀬戸内海を往く船も増え、停泊港のひとつとして少しずつ栄えてきた。この海の要所にいち早く注目したのは平清盛である。音戸の瀬戸が切り開かれてますますにぎやかになった。やがて交通機関が海上から陸上へと移り、多くの港町がさびれていくなか、呉だけはめざましく発展していく。

「軍都」——明治22年、呉鎮守府が呉港に置かれて以来、第二次世界大戦が終わるまで、呉はこう呼ばれ続けた。呉鎮守府に続いて海軍工廠も設立され、あの戦艦「大和」を生んだ。第二次世界大戦が終わると同時に軍都・呉も歴史の中に深く埋められ、静かな日々を取り戻す。戦後の呉は、「平和産業港湾都市」として生まれ変わった。

◇「呉」の名称（「くれ」のめいしょう）

「呉」の名称は永暦元年（1160）6月28日付の美福門院令旨（「高野山文書」）に「安摩庄呉浦事（あまのしょうくれうらのこと）」として「召取国司庁宣、成副庁後下文、遣僧正御許了、自彼定奉送歟」とあるのが初見である。また、元暦元年（1185）1月9日付の源頼朝下文（「石清水文書」）で、八幡宮寺領をあげたなかに「安芸国呉保」があり、「右件庄々者八幡宮往古神領也、而近年之間依平家追討、守護武士等或猥抑留御年貢、或宛催兵糧米」とある。

「呉」の訓については康応元年（1389）の「鹿苑院殿巖島詣記」に「内の海、かうしろ、ひろ、くれ、はたみ（中略）かやうの浦々過ぎさせ給へり」とあり、「くれ」と読んだことがわかる。

「くれ」の語源については、呉浦を包含する宮原・和庄(わじょう)・庄・山田の地(いわゆる呉平野)が灰ヶ峰(いげがね、標高737m)を中心とする9つの嶺に囲まれるため「九嶺(くれ)」としたとも、灰ヶ峰から切り出された樽(くれ、船材になる木)によっても、渡来人の呉人に起因するともいわれるが、いずれも確証がない。

◇軍港都市呉の形成と特徴(くんこうとしくれのわじょうとくちょう)

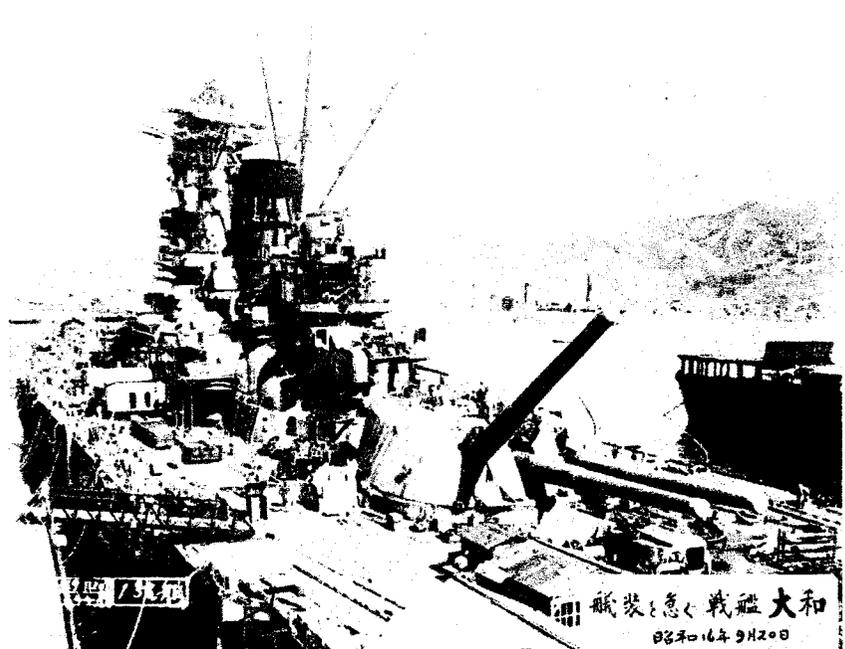
明治19年(1886)5月4日、第2海軍区の鎮守府が呉港に設置されることが決まった。海が深く、周囲を山と島に囲まれ防御および艦艇の入出港と生産活動に適しているというのが選定の理由とされている。明治の元勳伊藤博文は、この守りの堅い呉鎮守府について「帝国海軍第一ノ製造所」(「秘書類纂兵政関係資料」昭和45年(1970)復刻)としての位置づけを与えている。

呉鎮守府の開庁後、造船部の工事が本格化し、明治24年(1891)4月第一船渠(せんきょ、ドック)の建設を皮切りに次々に関係施設を完成。明治30年(1897)造船部は造船廠(そうせんじょう)と改組され、造船部門の拡張があいついだ。

呉鎮守府開庁当時、造船部ともに設置された兵器部には、工場が1棟あったにすぎなかった。国の独立は兵器生産の独立をもって可能になると考えた海軍省は、兵器部とは別に巨費を投じて呉兵器製造所を建設する計画をたてた。この仮設呉兵器製造所は明治27年(1894)9月起工、翌年12月竣工。さらに明治30年(1897)5月には呉海軍造船廠となった。

明治36年(1903)呉海軍造船廠と呉海軍造兵廠は、事業の体系化をはかる目的で「呉海軍工廠」(海軍直営の兵器製造工場)に統一された。新たに発足した呉工廠は明治38年(1905)巡洋艦筑波とその姉妹艦生駒をほぼ同時に短期間で建造したことによって、横須賀工廠を抜いて日本一と認められるようになった。

そのうち呉工廠は、日本一の技術を持つ一番艦を建造する工廠として、明治40年(1907)当時世界最大級の戦艦安芸(1万9800排水t)をはじめ、大正9年(1919)に世界最初の16インチ主砲を搭載した長門(3万3800排水t)、さらに昭和15年(1940)に日本海軍の技術を結集した世紀の巨艦大和(6万9100排水t)を進水するなど、全部で5隻の戦艦を建造した。さらに航空母艦7



《呉海軍工廠で艦装中の戦艦大和》

隻、巡洋艦11隻、駆逐艦22隻、潜水艦59隻、そのほか25隻を建造している。

◇鎮守府 (ちんじゅふ)

明治から昭和にかけて日本の海岸と近海の防衛などを担当した海軍の官庁。

各軍港におかれて所管する海軍区の防禦(ぼうぎょ)・警備・出師準備をつかさどり、鎮守府司令長官は天皇に直屬して部下の艦船舞台を統率した。なお軍政については、司令長官は軍令部総長(海軍軍令部長)の指示を受けることとされていた。

明治8年(1875)の海軍省の計画では、東海鎮守府を横須賀に、西海鎮守府を長崎に設置するよう考慮された。東海鎮守府が横浜に仮設されたのは翌明治9年(1876)9月14日で、明治17年(1884)12月15日横須賀に移転し、同時に横須賀鎮守府と改称された。西海鎮守府は計画だけで設置にはいたらなかった。

明治19年(1886)になると、日本の沿岸と近海を5つの海軍区に分けることが決められ、呉および佐世保鎮守府が明治22年(1889)7月1日に、舞鶴鎮守府が明治34年(1901)10月1日に設置された。横須賀・呉・佐世保・舞鶴の順にそれぞれ第1～第4海軍区に相当するが、明治36年(1903)1月21日、室蘭を軍港とする第5海軍区の計画は断念された。

日露戦争の結果により明治38年(1905)2月6日、旅順口鎮守府を設置、翌年10月1日には旅順鎮守府と改称されて関東州海軍区を管轄したが、大正3年(1914)4月1日の同鎮守府の廃止に伴い、同海軍区は佐世保鎮守府の所管となった。また、韓国併合の結果により明治44年(1911)1月1日、鎮海を軍港とする第5海軍区を設定された鎮海鎮守府は、結局実現することなく、要港部(鎮守府より一段下の官庁)にとどまり、同海軍区も佐世保鎮守府が終始これを管轄した。

なお、ワシントン軍縮条約に伴う軍縮によって大正12年(1923)4月1日、3海軍区となり、舞鶴鎮守府が廃止されて要港部となったが、時局の緊張により昭和14年(1939)1月15日、鎮守府として復活して4海軍区となり、太平洋戦争に臨みそのまま敗戦を迎えた。

★入船山 (いりふねやま)

呉市史跡(昭和41年[1966]1月10日指定)。

この地は旧海軍練兵場で、現在の呉市民公園の北側にある丘陵である(幸町4丁目)。うっそうとした樹木に被われ、繁華街にあるとは思えない景観となっている。これは、この地が宮原村時代に八幡社が鎮座していたことによる。この神社は「亀山神社(八幡)」と呼ばれ、飛鳥時代の大宝3年(703)に鎮座地と定められたと伝えられる。

『芸藩通史』には

「八幡宮。宮原村にあり。山、初め入船山と称す。後、今の名(亀山)に改む。同殿の神十五座あり。大宝三年、長門国亀山より勧請すという。また社記に、初め柘原村に豊後姫島の神を勧請し、大宝に当村に移り奉りし、因つて比売志麻(ひめま)社とも称すという。されば初め姫島の神を祭り、後に亀山より勧請せしにや」と記されている。

しかし、明治19年(1886)、旧海軍の西海鎮守府が呉(のち呉鎮守府)に置かれることになり、その用地となって地域一帯は海軍に買い上げられた。翌年亀山八幡は清水通りの丘陵上(清水1丁目)に遷座し、いまでも当地にある。

その後、入船山には軍政会議所兼水行社が建てられ、これがさらに鎮守府長官官舎となったのでこの山を「長官山」と俗称するようになった。太平洋戦争後、進駐米軍および英豪連



《海上自衛隊呉総監部(旧呉鎮守府)》

合軍の司令長官官舎として約10年間使用された。のち呉市に引き継がれて記念館となったが、一般に公開されるまで約80年間世間から隔絶されていた。

★入船山公園・記念館 (いりふねやまこうえん・きねんかん)

JR呉駅から南東方約1kmのところに入船山公園がある。公園入口の赤煉瓦造りの呉市立美術館を左手に見ながら進むと、入口左手に休憩所(旧東郷邸)があり、その先に旧呉海軍工廠(こゝろ)の大時計が見える。さらになだらかな坂を登っていくと、右手に旧火薬庫が、左手に展示館が、正面に旧呉鎮守府司令長官官舎(重要文化財)が見え、これらを総称して入船山公園、官舎を入船山記念館といっている。なお、公園内には記念館に隣接して呉市立歴史民俗資料館の瀟洒(しょうしゃ)な建物も建っている。

＊旧呉鎮守府司令長官官舎 (きゅうちんじゆふしれいちょうかんかんしゃ)

重要文化財(平成10年[1998]12月25日指定)。

明治22年(1889)、入船山に洋風木造総2階建の軍政会議所兼水交社(海軍の社交場)が建てられた。この建物は、翌年4月21日の呉鎮守府開庁式に行幸した明治天皇の行在所(あんざいよ)として利用された。明治25年(1892)からは呉鎮守府司令長官官舎となって初代長官中牟田倉之助が入った。以後、長官官舎(初代~6代)として使用され、水交社は呉市に移転した。しかし、明治38年(1905)芸予地震で崩壊したため、同年その資材を一部利用して現在の建物が建てられた。



《呉鎮守府司令長官官舎》

その後は、昭和20年(1945)まで長官官舎(7代~32代)として使用され、戦後は昭和31年(1956)まで進駐していた占領軍司令官官舎として約10年間使用された。返還後は呉市が引き継ぎ、昭和41年(1966)、入船山は呉市の史跡となって昭和42年(1967)から一般公開された。

明治38年(1905)、当時の資料が発見されたことを受け、財団法人文化財建造物保存技術協会の協力により、平成3年(1991)から平成7年(1995)にかけて調査・解体・修復事業を行い、建築当初の姿に復元された。

この建物は木造平屋建で、洋館部と和館部からなっている。洋館部の外観に英国風ハーフティンバー様式を取り入れ、屋根は天然スレートの魚鱗葺きになっている。洋館部の壁や天井には、全国でも珍しい金唐紙(きんからがみ)が張られている。

☆金唐紙(きんからがみ)

17世紀半ば、ヨーロッパの宮殿や寺院、公共施設の壁、天井に子牛や山羊などの皮を加

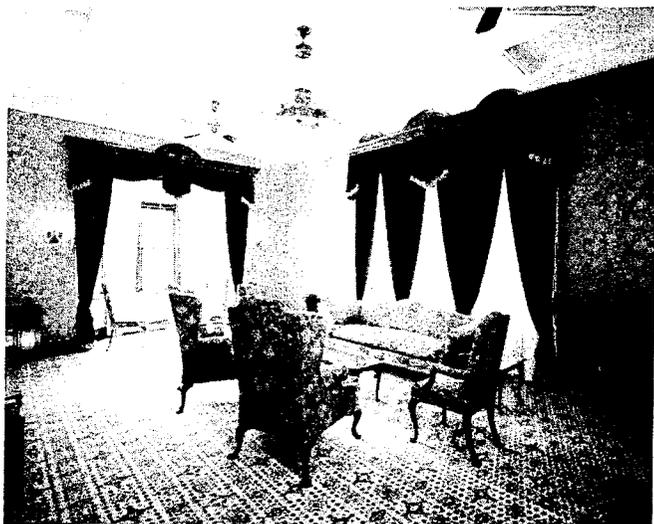
工した装飾皮が多く使われていた。この装飾皮は、皮に金属箔を張り、花や動物などをデザインし、プレスして塗料、ワニスなどで彩色し、仕上げられている。これが日本に渡来し、舶来の皮という意味から「金唐皮」と呼ばれた。日本ではたいへん珍重され、金唐皮を小さく切り、たばこ入れ、菜籠、手箱などの装飾品、日用品に使われた。

明治6年(1873)、ウィーン万国博覧会に、当時日本橋にあった竹屋商店が大型の厚紙を出品したのが、わが国の壁紙製造の嚆矢(ひし)である。この壁紙は金唐皮を和紙で模したもので、金唐紙、あるいは金唐皮紙、金唐和紙とも呼ばれ、ヨーロッパで高い評価を受け、注文に応じて輸出されるようになった。

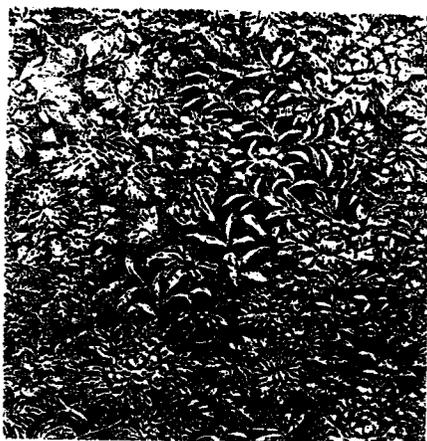
明治初期には大蔵省印刷局でも製造されるほどで、国内でも高級洋館建築によく壁紙として使われたが、大正時代以後は使われなくなり、今では製造する企業もない。旧呉鎮守府司令長官官舎の金唐紙は、「上田尚金唐紙研究所」と「紙の博物館」の協力のもとに復元されたものである。

なお、現存する各地の金唐紙としては、

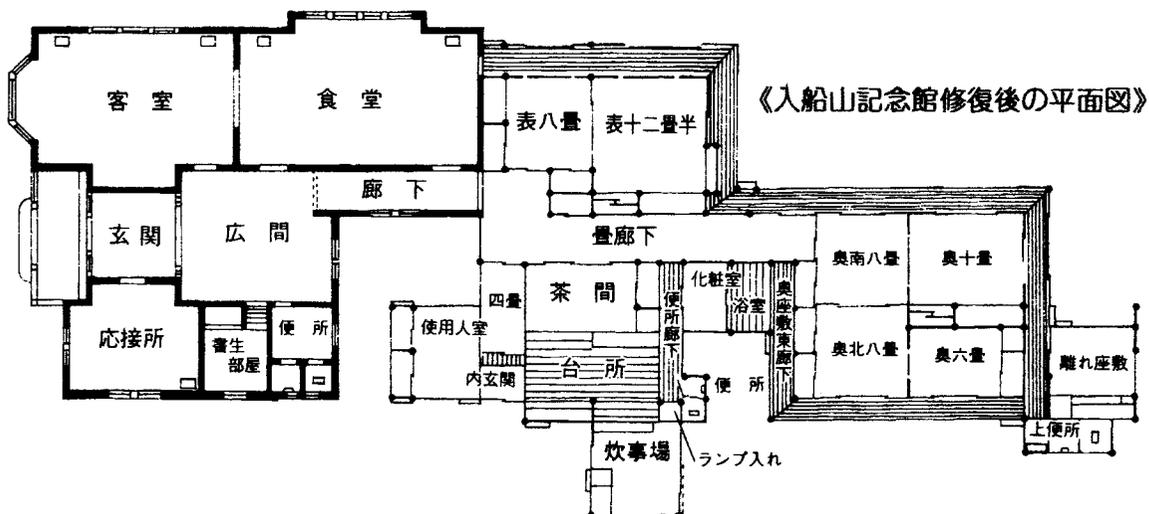
- ①北海道小樽市 旧日本郵船株式会社小樽支店(重要文化財)
[明治39年(1906)ポーツマス条約に基づき日露国境画定会議に使用]
- ②青森県弘前市 旧第五九銀行本店本館(重要文化財)
- ③兵庫県神戸市 移情閣(重要文化財) などがある。



《呉鎮守府司令長官官舎の客室》



《客室の金唐紙》



《入船山記念館修復後の平面図》

＊旧呉海軍工廠時計台 (きゅうくれがいくんこうしょうとけいだい)

大正10年(1921)に、海軍工廠造機部の屋上に設置されていたもので、昭和56年(1981)整備、復元された。名古屋市の愛知時計電気の製造で、現在動いている国産の電動親子式衝動時計としては最古のものである。

戦後は昭和46年(1971)まで石川島播磨重工業呉工場本部事務所内にあったが、同年5月に入船山記念館に移され、庭に展示されていた。しかし、その歴史的な価値を惜しむ声があがり、昭和55年(1980)、故平岡明氏をはじめとする有志によって復元委員会がつくられ、入船山記念館東のスロープに移し、製造元に修復を依頼、翌年6月10日の時の記念日に塔時計が復元完成、現在も時を刻み続けている。

時計の外観は高さ約10mの箱型、本体は1辺2.4mの立方体で、4面に直径1.5mの文字盤をもつ。内部機械の特色は、①大正期としては画期的な衝動時計(親子式)を採用していること、②動力装置・動力伝達装置・軸受と潤滑装置などに艦艇兵器独特の機械用式がみられること、③歯車の材質としてネーバル黄銅を用い、歯切加工技術が優れていることなどである。こうした特色に加え、機械の維持、保守が適切に行われていたため、復元時点で製造後60年も経っていたのにもかかわらず稼働させることができたようだ。



《旧呉海軍工廠時計台》

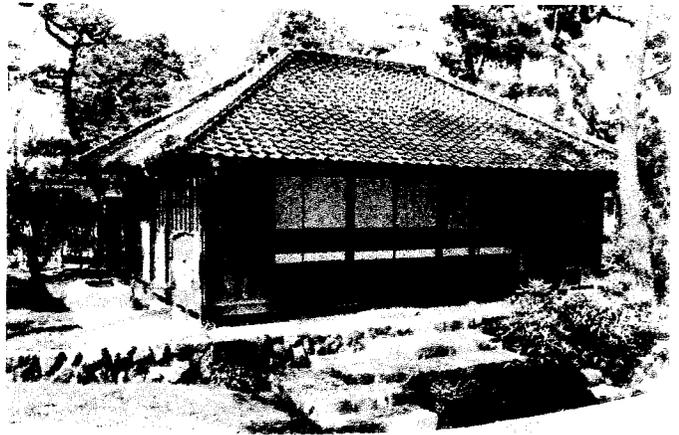
＊1号館 [旧火薬庫] (いごうかん [きゅうがやくこ])

警固屋(けごや)高鳥砲台にあったものを、昭和42年(1967)移築し、復元したものである。

＊休憩所 [旧東郷邸] (きゅうけいしょ [きゅうとうこうてい])

東郷平八郎が呉に在任中(現在の宮原5丁目、明治23年(1890)5月13日～明治24年(1891)12月14日、海軍大佐・呉鎮守府第2代参謀長)に住んでいた家の離れ屋敷である。長らく放置されて崩壊に瀕していたのを、呉東ロータリークラブ創立20周年記念行事として昭和55年(1980)、入船山記念館入口に移築復元されたものである。

家は8畳と6畳の2間で、3尺幅の縁側が6畳・8畳の片面と8畳の半面、その半面が床の間になっており、簡素な造りである。



《旧東郷邸 (休憩所)》

◇呉と東郷平八郎 (くれととうこうへいはちろう)

東郷平八郎が初めて呉に来たのは明治16年(1883)、測量艦第2丁卯(ていぼう、125t)の艦長の時である。

『東郷元帥詳伝』(小笠原長生著)によれば、明治16年2月、朝鮮事変がおさまったので、

下関に帰還した天城艦副長の東郷少佐に2月24日、日進艦に便乗して上京せよとの命があり、3月11日海軍省に出向くと翌12日、第2丁卯艦長に任じられたという。

『呉市史』によると、同年2月10日、海軍省水路部の肝付兼行少佐ら5名が測量艦第2丁卯で呉港に到着し、宮原村（現、呉市宮原町）の勝盛平九郎氏宅に止宿、7月25日、呉を去って長崎に向かった。この第2丁卯の艦長が東郷少佐で、同年3月12日から翌明治17年（1884）5月14日まで同艦に乗っていた、とある。

また、『呉市史』によると、次の来呉は明治23年（1890）5月13日から明治24年（1891）12月14日の間で、海軍大佐・呉鎮守府第2代参謀長として約1年7ヶ月在任した。この間の東郷の居住地は確実な史料に残っていない。

『東郷元帥詳伝』によれば、その次が明治27年（1894）4月27日から6月8日まで、呉海兵団長としての在任である。『呉市史』にはこれについて記載がないが、この間、宮原村の山中忠利方に寓居していたことは史料（賃貸書類等）によって確実である。

実はこの家の離れが入船山記念館にある現休憩所で、参謀長時代にもここに寄宿していたと考えられている。山中邸は宮原5丁目の正円寺の東側の山手にあつたが、大正15年（1926）、火災で焼失し、この離れだけが残った。

現在、正円寺の前を広い道路が通っているが、この道路に並行して寺の山門に至る狭い坂道がある。地元ではこの坂道を「東郷坂」と呼んでいる。東郷は山中邸の寓居からこの坂を馬に乗って下って鎮守府に通勤していたという。

☆呉海軍工廠跡（くれがいくんこうしょうあと）

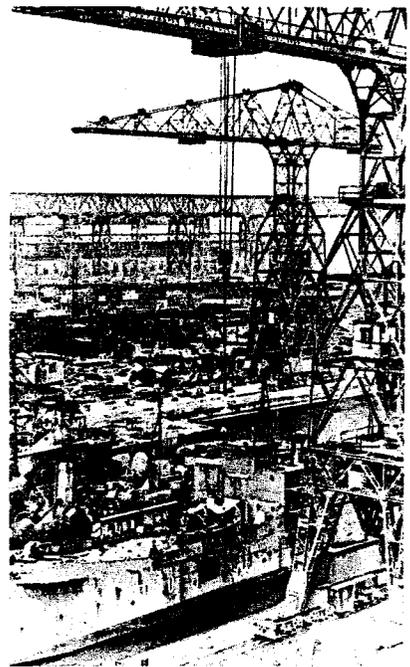
入船山公園を出て坂を上りきり、右折して南へ進むと、呉港に面した呉海軍工廠跡、現在の昭和通り工業地帯である。

呉鎮守府の開庁と同時に造船部と造兵部がおかれていたが、日露戦争が始まる3ヶ月前、明治36年（1903）11月、この二つが合体して東洋一の巨大工場、呉海軍工廠が誕生した。戦艦大和をはじめ、戦艦長門、巡洋艦筑波など、数多くの軍艦が建造された。呉は「セーラー服の水平とナッパ服の海軍職工」で埋められる町となった。太平洋戦争中の呉の人口は40万8千人に達したが、当時の住民構成は、呉に本籍をもつ住民より外部からの住民の方が圧倒的に多く、また、女性に比べて男性の方が多かった。

昭和20年（1945）7月の戦災によって旧市街地は全滅、死者は1800人を超えた。さらに相次ぐ空襲によって工廠も大被害を受け、そのうえ敗戦で海軍を失った呉は、人口も15万人余に激減した。しかし戦後、旧軍港都市転換法の施行で平和産業港湾都市として再発足し、旧海軍の巨大ドックや施設を利用して大企業の誘致に努力が払われた。

戦艦大和を進水させた造船技術の伝統は、世界最大のタンカーを次々と生み出していった。世界初の10万重量トンのタンカー「ユニナース・アポロ」を昭和34年（1959）に建造したのをはじめ、その後も50万トンのタンカーを生み出している。

昭和通り工業地帯の一画には、現在、海上自衛隊の諸施設があり、各種の自衛艦が灰色の艦体を構内に浮かべている。



《終戦時の呉海軍工廠》

★音戸の瀬戸 (おんどのせと)

倉橋島と呉市の休山(やすみ
やま)半島南西端との間の水道で、長さ約800m、幅は最狭部で約70mである。

約八百数十年前、平清盛が厳島参詣の便のため切り開いたと伝えられている。清盛の開削に関する確証はないが、平氏が日宋貿易のためのみならず、厳島神社への崇敬から、厳島への内海航路を整備したことは間違いない。この瀬戸が平家から厳島神社へ寄進された安摩庄(あまのしょう)に属していたことを考え合わせれば、

平氏が航路整備上何らかの手を加えた可能性は否定できない。

康応元年(1389)3月、足利義満の厳島参詣に随従してこの瀬戸を通った今川了俊は『鹿苑院殿厳島詣記』に「おむどのせとゝいふは滝のごとくに潮はやく、せばき処なり。舟どもをし落とされじと、手もたゆくこくめり」と述べ、「船玉のぬさも取りあはずおち滝つ早きしほらを過にける哉」と詠んでいる。しかし、清盛の音戸開削のことには一言も触れていない。

清盛の音戸の瀬戸開削伝承は『房頭覚書』に「清盛福原ヨリ月詣テ在、音渡瀬戸其砌被掘」とみえ、音戸の瀬戸西岸の清盛塚が室町時代と思われる宝篋印塔であることや、『輝元公御上洛日記』に「清盛ノ石塔」とみえることから、それ以前、室町時代後期に成立したものと考えられている。

夕日を扇で招き返して1日で完成させたとか、人柱の代わりに小石に一切経を書いたともいう。ともあれこの瀬戸を通って厳島に向かういわゆる「安芸地乗航路」が中世・近世を通じて重要な交通路として機能してきたことは確かである。

今も瀬戸内海航路の要衝で、潮の流れが速いため難所としても知られている。

昭和36年(1961)、真紅の音戸大橋によって呉市と陸続きになった。音戸大橋は日本初のアーチ型らせん式高架橋で、全長172m、高さ23.5mである。

★倉橋島 (くらはしま)

江田島・能美島の南に倉橋島がある。広島県で最大、瀬戸内海でも4番目に大きい島で、北部の音戸町、南部の倉橋町からなっている。この島には昭和48年(1973)、能美島(大柿町)との間に早瀬大橋ができたので江田島方面からも渡れるが、呉方面から音戸大橋を経由するのが通常のルートである。

花崗岩質の急峻な山地が広く分布し、平坦地は海岸線の緑辺だけに限られる。農業は、山野斜面を切り開いた段々畑でミカン・パレイショ・米などを栽培している。年の生産額の約半分がミカンによって占められている。ハウストマト・ダイコン・バラ・洋ランなど生産性の高い農作物の生産も多い。漁業も盛んで、牡蠣養殖が海産物の半分を占め。また、エビ・タイ・イワシ・アナゴ・ボラなどが水揚げされ、その一部は倉橋町内で干物に加工されている。さらに石材業として花崗岩が切り出され、県の内外へ出荷されている。

火山・亀ヶ首・鹿老渡・桂浜は瀬戸内海国立公園の指定区域に含まれる景勝の地で、年々観光客が増加している。また、遣唐使船を復元し、時代ごとの模型船を展示している倉橋町長門の造船歴史館も開館している。



《音戸大橋 (日本初のアーチ型らせん式高架橋)》

☆清盛塚 (きよもりづか)

音戸の瀬戸の倉橋島側の海岸にある岩礁に石垣が造られ、その上に立つ宝篋印塔のこと。

音戸の瀬戸を切り開いた平清盛が、人柱の代わりに一字一石の経石を海底に沈め、難工事を完成。元暦元年(1184)、その功績をたたえ、供養のため清盛塚を建立したとされている。

しかし、高さは2m余の宝篋印塔はその型式から室町時代のもと思われる。また、清盛が音戸の瀬戸を開削したという伝説が成立するのも文献的に室町時代と考えられている。この塔に関する最も古い資料は、天正16年(1588)の『輝元公御上洛日記』の月9日条で、

「午ノ刻ニ瀬戸を御舟被出、此戸中に清盛ノ石塔有之」とみえる。

『芸藩通史』は次のように記している。

「迫門の口に石をたゞみて上に石塔を立つ。世に相国(しょうこく、清盛)の塚といふ。塔四層、凡高六尺、台座方一尺八寸。おもふに、これ迫門成る時、経石をうづみて鎮護とせしなるべし。或は云、相国、疏鑿(そく)してより国民其利受る大かたならず。故に塔婆を建て其恩徳を報ず。因(よ)りて御塔の迫門と号す。今隠戸(おんこ)と書くは誤なり。又は隠れたる門と云義ともいへり」

旧暦3月3日には塚の前で清盛祭が行われ、大名行列が町に繰り出す。



《大正時代の清盛塚》

★江田島 (えだじま)

江田島は能美島と江田島湾をはさんだ飛渡瀬(ひのせ)地峡で陸つづきで、瀬戸内海でも5番目に大きな島である。また、能美島の北部を西能美島(沖美町・能美町)、南部を東能美島(大柿町)と呼んでいる。江田島は呉港の前に横たわっているやや細長い島である。島は中央北寄りにそびえる古鷹山(ふるたかやま、標高376.3m)、クマン岳(399.8m)を中心に山地が多く、周縁部にわずかに平地があるにすぎない江田島と東西能美島に囲まれる江田島湾は天然の要塞で、北西の津久茂瀬戸(つくもせ)でわずかに外海と結ばれている。

江田島は古くは「衣田島」と表記し、安摩庄(あまのしょう)に属していた。仁治3年(1242)3月12日付の「安芸国安摩庄内衣田島荘官百姓等解」(卷子本「厳島文書」)によれば、当時、島内の名主と思われる百姓10人の名がみえるが、そのうち少なくとも5人は水夫として厳島神社へ日御供米を運んでいる。鎌倉末期・南北朝期の衣田島公文職は西隣の能美島に本拠をおく高田氏(能美氏)であったが、平姓を名乗っているのが、かつての惣公文(そうくもん)平守澄の同族と考えられている。南北朝期には伊予から久枝氏が来住したと伝えられるが、その動静は明確ではない。

戦国期は大永3年(1523)、大内氏が厳島神主家を攻めた際、大内方水軍の能美氏が江田島を攻撃したこと(「山野井文書」)、天正10年(1582)2月18日、毛利輝元から伊予の村上武吉に江田島が宛行(あてが)われたこと(「村上凶書家文書」)が知られているだけである。

江戸期にはいると、元和5年(1619)の「安芸国知行帳」では、島北西部の津久茂村を除いた地が江田島村となり、村高は390石余である。近世中期から各浦々で新開が相次ぎ、明治3年(1870)までに石高は964石余に達し、他に高入していない新開が36町もあった。

明治3年の郷村高帳によれば、商戦にかけられる船床運上(ふねだうじょう)が23貫790文しかなく、鰯網運上(いわしあみ)はまったくない。したがって海運・漁業の面ではそれほど目立った存在ではなかった。

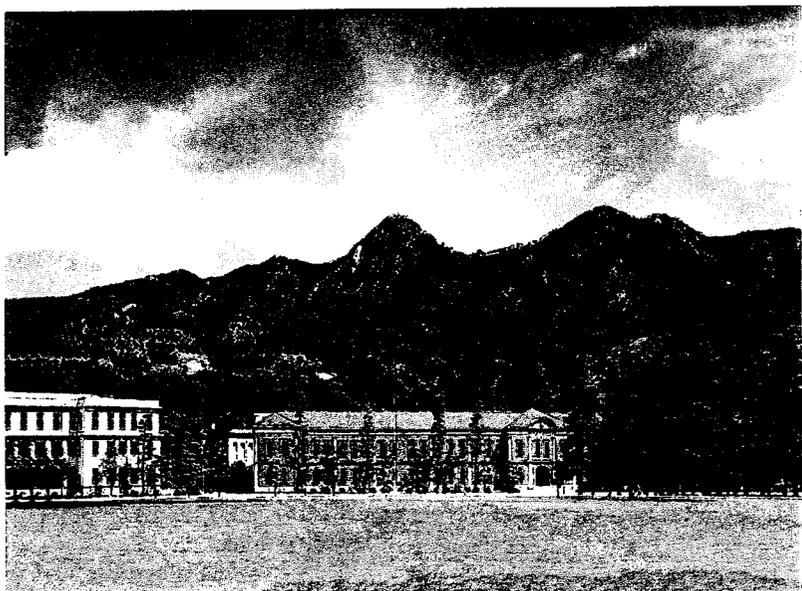
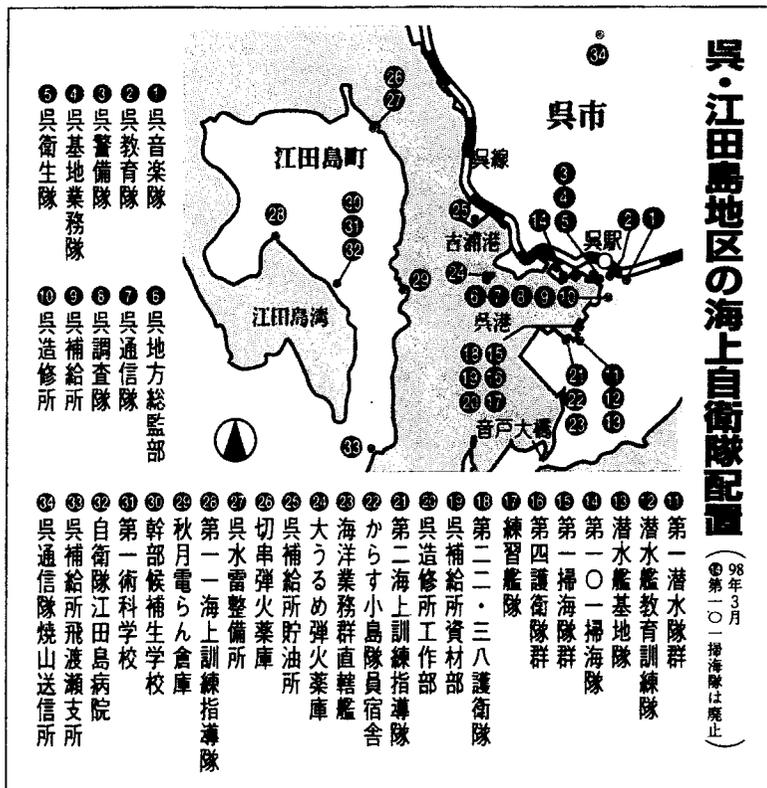
◇海軍から自衛隊の島へ (かいぐんからじえいたいのしまへ)

江田島は近世以来、半農半漁の普通の島であった。明治18年(1885)3月、西海鎮守府の有力候補地に呉とともに江田島があがったが、「島ゆえに不便」との理由で鎮守府は呉に決まった。しかし、翌明治19年(1886)、海軍兵学校の江田島移転が決まり、明治22年(1889)呉鎮守府開庁の前年8月1日、いままで東京築地にあった海軍兵学校が江田島に移転してきたことによって大きく変貌することになった。

さらに明治32年(1899)8月「要塞地帯法」によって呉要塞地帯の区域に含まれ、翌年には島の東海岸秋月に海軍の火薬庫が設置され、その後、島内各地に海軍関係の施設があいついで整備され、江田島は文字通り「海軍の島」になった。

海軍兵学校が江田島に移って最初の卒業生(明治22年[1889]4月)は第15期80名で、日露戦争のとき旅順港閉塞隊で知られる広瀬武夫中佐がいる。ちなみに、太平洋戦争中連合艦隊司令長官として昭和18年(1943)4月、ソロモン諸島上空で戦死した山本五十六は32期生であった。

江田島はイギリスのダートマス、アメリカのアナポリスと肩を並べる世界3大海軍兵学



《旧海軍兵学校生・自衛隊の生徒が訓練のため登る古鷹山》

校所在地として世界にも知られるようになった。それだけに「江田島」は海軍兵学校の代名詞でもあった。しかし、昭和20年(1945)8月の敗戦にともない、同年10月20日付で廃校になった。

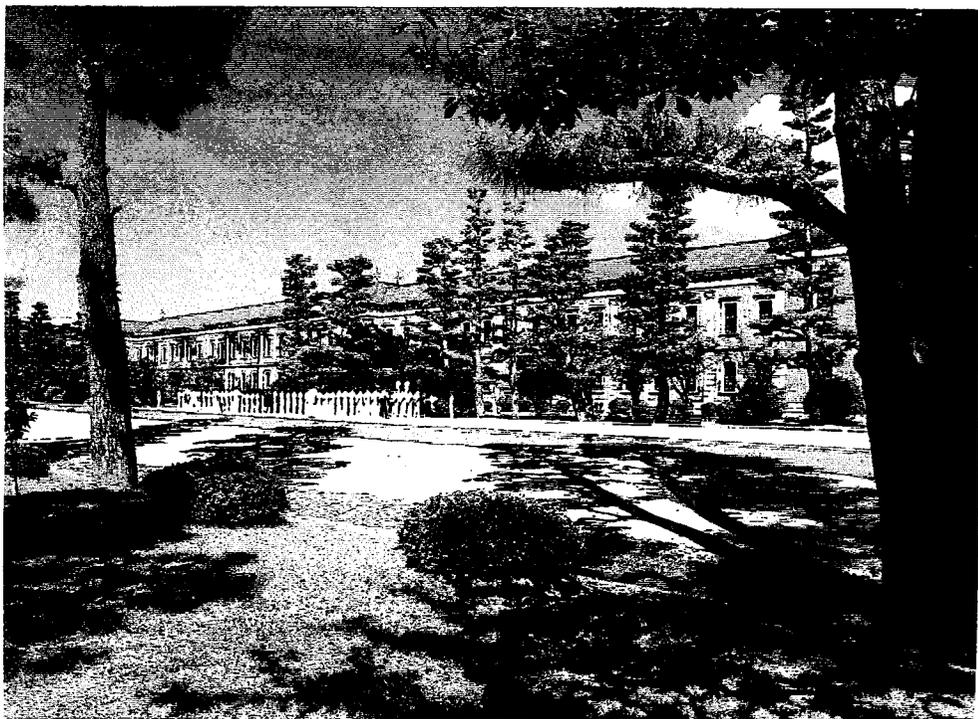
終戦後間もない10月、占領軍が江田島に進駐。昭和30年(1955)10月、

日本に返還されるまで、江田島はいわゆる「基地の町」としてにぎわった。その後、旧海軍兵学校の建物を利用して、海上自衛隊幹部候補生学校・第一術科学校など、海上自衛隊の教育機関が設置され、毎年数多くの自衛官を育て送り出している。

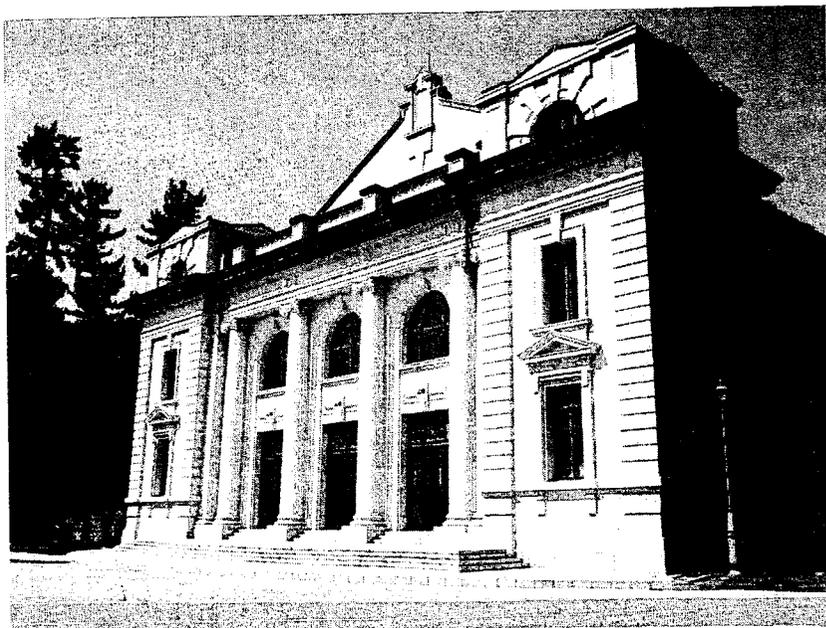
＊第一術科学校(だいいちじゅつががっこう)

第一術科学校は、艦艇に乗り組み、砲術、水雷、船務、通信、航海、気象・海洋、掃海・機雷、運用、応急および潜水等の配置で勤務する隊員に対して専門教育を行っている。現在約800名の幹部及び海曹士の学生が教育を受けており、年間約3500名の学生が江田島を巣立ち全国各地で活躍している。

その校舎はレンガ造りの旧海軍兵学校庁舎東生徒館



《旧海軍兵学校(現海上自衛隊第一術科学校・幹部候補生学校校舎)》



《大講堂》

(昭和16年竣工[1941])で、もし現在学校として使用されていなければ、間違いなく指定文化財になるはずである。玄関前の美しい庭がひとときわ目を引く。

＊幹部候補生学校(かんぶこうほせいがっこう)

幹部候補生学校は、海上自衛隊の初級幹部自衛官として勤務するのに必要な知識と技能を修得させるための教育訓練を行っている。年間約500名の一般幹部候補生、幹部予定者、飛行幹部候補生等が教育を受け、3等海尉に任官して巣立っていく。

校舎は第一術科学校と同じである。

＊大講堂 (だいこうどう)

大正6年(1917)当時約30万円をかけ、瀬戸内産の御影石(花崗岩)で造られた建物である。講堂内の床

は石畳、2階には貴賓席があり、天井はドーム型で舵輪をかたどったシャンテリアが設けられている。海軍兵学校時代には、天皇の名代として宮様の臨席を仰ぎ、厳粛に入校式、卒業式等の儀式が行われた。収容人員は約2000名。

＊教育参考館(きょういくさんこうかん)

教育参考館は昭和11年(1936)竣工。旧海軍の徳育・情操の場として約4万点の参考品が保管されていた。戦後は幕末から第2次世界大戦までの海軍関係者の書や遺品、約1万6千点余が展示してある。とくに自らを犠牲にして国のために散っていった若き特攻隊員の遺書や遺品が強く胸を打つ。

◇井上成美(いのうえしげよし)

明治22年(1889)12月9日～昭和50年(1975)12月15日。

海軍大将。宮城県生まれ。海軍兵学校(37期)・海軍大学校卒業。イタリア駐在武官を経て海軍大学校教官となる。昭和5年(1930)のロンドン軍縮条約問題では条約派とみなされた。のち軍務局第1課長となり、統帥権拡大の動き阻止に動いた。二・二六事件に際しては、横須賀鎮守府参謀長として天皇のお召し艦比叡を芝浦に回航した。

昭和14年(1939)、軍務局長として陸軍の日独伊三国軍事同盟案に反対。また、航空本部長として大艦巨砲主義を批判し、海軍の空軍化を



《教育参考館》



《井上成美》

唱えた。昭和16年(1941)、第4艦隊司令長官となり、ミッドウエー海戦に参加。翌昭和17年(1942)、海軍兵学校長となり、英語廃止論を阻止した。太平洋戦争末期には、海軍次官として高木惣吉を起用し、終戦に向けて対重臣工作を命じた。

◇井上成美と海軍兵学校(いのうえしげよしとがいくんべいがっこう)

誤解されやすいので確認しておくが、海軍兵学校は兵隊になるための学校でなく、士官になるべき人材に兵学(軍事学およびその理解に必要な普通学)を教える学校で、全寮制である。このため古くは「海軍兵学寮」といった。寮生活の教育に力を入れるウエートが大きいことは、寮(生徒館)が教室よりも大きいことからわかる。これは世界の兵学校に共通する特性である。

井上成美が海軍兵学校に着任したのは、太平洋戦争2年目の昭和17年(1942)11月である。昭和19年(1944)8月には海軍次官就任のため校長を退任している所以在任期間は2年弱、71期生から75期生の教育にあたった。

この間、太平洋戦争の激化により、71期生・72期生約600人卒業、73期生900人卒業、74期生1000人入校、65期生約3400人と入校生は激増していった。兵学校の運営は収容人員・施設容量・教官数・教材の面でも生徒数に追いつくことが困難になっていた。しかし、井上はある意図をもって、大人数の生徒を受け入れることには反対せず、短時間で卒業させることには強く抵抗した。

井上は士官教育について自ら改革すべき問題点を提起、教官たちを集めて直接講述し、その内容を直ちに印刷、配布して趣旨の徹底を図った。この冊子は教師間で「教育漫語」と呼ばれていた。現在の教育でも通用する内容といわれている。

兵学校の教育は数学・理化学・外国語・生活教育に重点が置かれていた。数学では暗記の学問ではないので、教えるにあたっては2分だけ説明し、8分は生徒に考えさせるように井上は指示。また、物理・化学では、諸現象は必ずしも理論のままにならないことを「誤差」の扱い方を通して学ばせるように指示した。自分で考えて正しい結論を出すことを重視したのである。

また、英語教育については、戦時下、「敵性語」として忌み嫌われるなか、「英語は学問ではなく、任務遂行のための技術である」と説いて英語教育廃止論を論破、その必要性を強調し、生徒には「英英辞典」を配布して使用を勧めたのである。

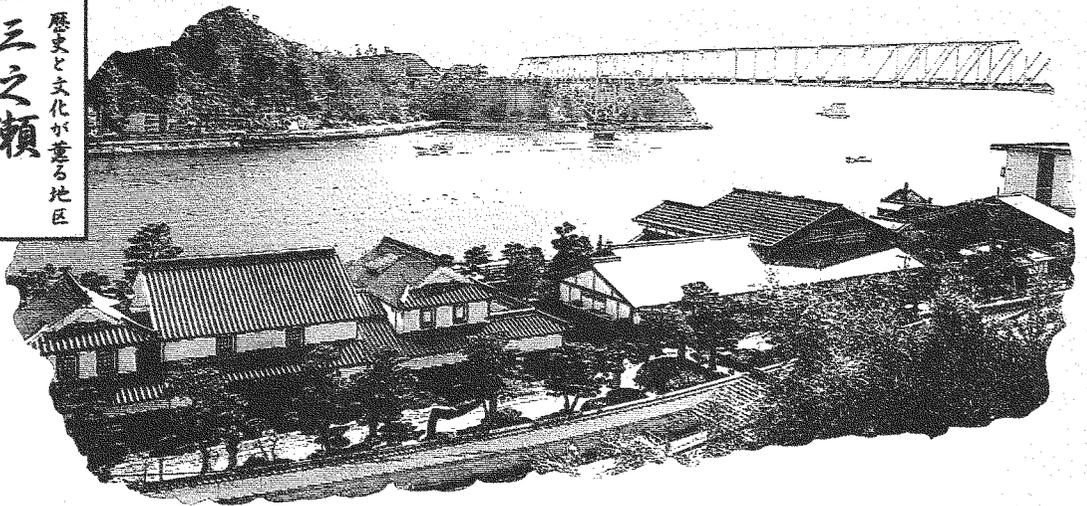
太平洋戦争が日本の敗戦に終わることを井上は早くから予知していた。井上は兵学校校長を退任して海軍次官となると、直ちに終戦の準備、政治工作に取りかかったのである。

井上が教育した73期生以下の卒業生は、敗戦後の日本復興の中核となった。井上が戦争のためということ度を度外視して、入校生の大増員を受け入れ、在校年限短縮に反対した真意はここにあったのだ。

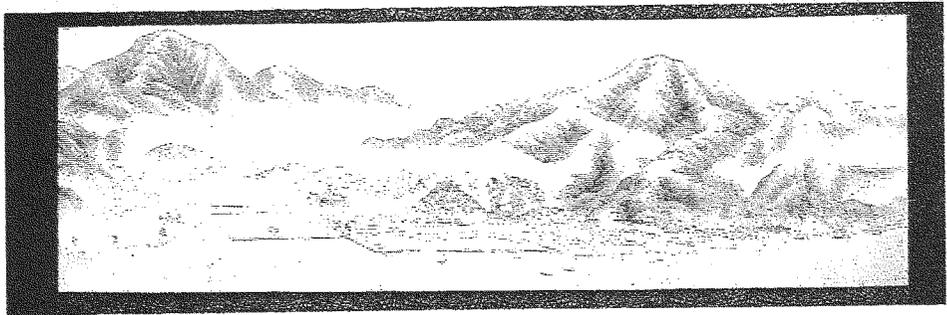
呉周辺の史跡を訪ねる —海を通して瀬戸内の歴史と文化を垣間見る—

企画 備陽史探訪の会 歴史民俗研究部会
資料作成・文責 平田雅都(歴史研評議員)
平田恵彦(歴史研部会員)

歴史と文化が
異なる地区
三之瀬



《三之瀬水道と松濤園》



《吳浦古図》



《旧海軍兵学校》

